

(4) 新規栽培者確保と新技術導入によるナス産地の活性化

【要約】

ナス栽培者数及び栽培面積維持のため JA と連携して新規栽培者を募るとともに、新規栽培者の早期技術習得と経営安定を支援した。この結果、令和2年度における冬春ナスの新規栽培者数は10人(150a)となり、作付け面積21.4haを維持、新規栽培者の80%が収量15t/10aを超えた。また、ハウス内環境や生育状況に基づいて栽培技術改善に取り組む研究会を組織化した。全量基肥施用による省力化に取り組み、生産者の約90%が本法を取り入れ、労働時間の削減が進んだ。

【目的】

JA ふうおか八女管内のナス栽培者数及び栽培面積は減少しつつあり(図1)、それに伴い生産量も減少した。そこで、栽培新規栽培者を確保するとともに、生産環境の改善により単位面積当たりの生産量を増加させ産地としての生産量を維持する。さらに、全量基肥施用により追肥の省力化を図る。

1 活動対象の概況

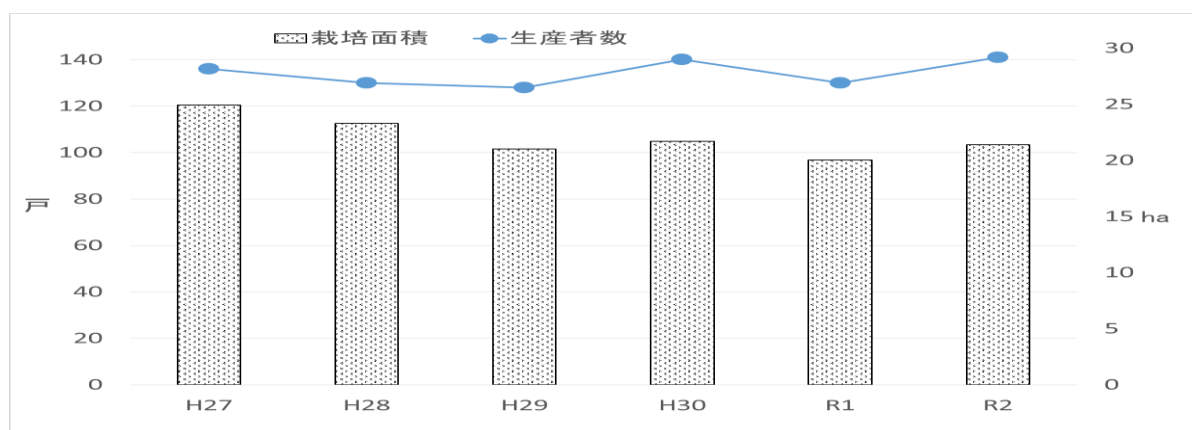


図1 JA ふうおか八女 なす部会 (冬春ナス+夏秋ナス) の動き

2 活動の内容等

(1) 新規栽培者の確保

普及センターは、JA と「作物相談会」や「夏秋ナス栽培希望者説明会」を開催し、ナス栽培者の拡大を目指した。令和元年から「栽培管理基礎セミナー」を開催し(写真1)、冬春ナスの新規栽培者の早期の技術取得と経営安定を目指した。セミナーでは座学と現地研修を中心に、受講生のナス栽培に関する知識習得を推進した。



写真1 なす栽培管理基礎セミナーの現地研修

(2) ハウス内環境測定と生育調査に基づいた栽培技術改善

平成30年に冬春ナス生産者10名が環境測定装置を導入し、ハウス内環境(図2)及び樹勢把握に基づいた栽培管理技術向上に取り組んだ。普及センターはJAと連携してこれらの生産者に呼び掛け、イノベーション研究会を令和元年度に組織した。研究会の検討会では各研究会員の生育状況について助言した。

自分のハウス内環境をチェック

【2月上旬/晴天日】

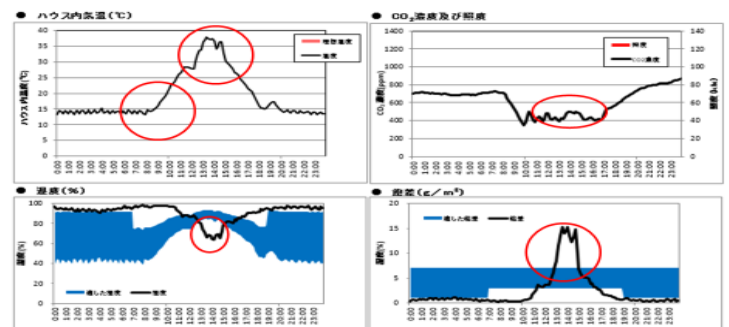


図2 環境測定装置で計測したデータ

(3) 全量基肥施肥の導入による省力化と安定生産

平成30年度に冬春ナスで全量基肥施肥の効果を検討し、収量や品質は定期的追肥した区と同等であること(図3)を確認した。この成果を栽培研修会等で周知し、全量基肥施肥技術の普及を図った。

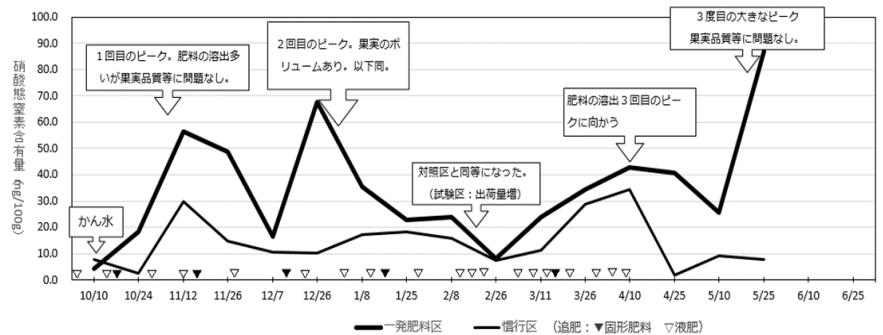


図3 硝酸態窒素含有量の推移とナスの生育状況 (H30年)

3 活動の成果

- (1) 栽培管理基礎セミナーの受講者数は令和元年度3人から2年度10人へ、新規者の栽培面積は令和元年度48.7aから2年度150aへそれぞれ増加した。新規栽培者の増加により栽培面積が維持できた。
- (2) イノベーション研究会では研究会員が生育調査結果からバランスシートを作成し、それに基づいてハウス内環境調節等を検討し、情報交換することで栽培技術の改善を進めた。その結果、研究会員が栽培環境や生育データをもとにして改善方向が判断できるようになった。これらの改善により令和元年産で研究会員の平均単収は部会平均を上回った。
- (3) 全量基肥施肥による栽培は令和2年には夏秋ナス・冬春ナスともに生産者の90%が取り組んでいる。この施肥法の普及により追肥の省力化が進んだ。

4 今後の見通し又は課題

冬春ナスでは、品種が「筑陽」から「PC筑陽」に更新が進んだ。しかし、「PC筑陽」では厳寒期の着果負担による樹勢低下がみられるなど栽培上の問題があるため、今後イノベーション研究会で得られた成果とあわせて「PC筑陽」の技術確立を進める。

また、将来の担い手となる新規栽培者の技術習得と経営安定を継続して支援、さらに既存生産者に対し新技術の導入により生産性向上を図り、産地を維持発展させる。